

## ‘呪われた血’の叛逆詩人 (15)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

目 次 苦闘する勇者 Byron

### 第十三章

本稿のテーマは

——ギリシャ、独立運動の義挙において多くの支援者を得ながらも、みづから卒いる土民軍の意志統一なきに 悪戦苦闘する Byron の苦悩を究めること——である。

謂ふなれば Lord Byron は cosmopolitan であった。人類愛にもえた cosmopolitan であった。‘窮屈な島’祖国英国を追放されたことは、貴族でありながら、革新的、反逆的思想のゆえに みづから 保守的英国を捨てなければならぬ宿命を負っていたからである。

ゲーテが ‘シェクスピア 以来の天才詩人である’ と高く評価したように詩人として最高峰の高さを窮めながら ギリシャ独立運動の義挙に身を挺すべく決意したことは Byron が cosmopolitan としての ‘行動の人’ であったことを立証する。

‘詩人が世の中で貢献しうることは 微少である。それならば、私は 剣をとって戦ほう’ と決意した。自分の死期を予知し、そして、‘人間完成’を求

めて最高の死地を欣求したことの証しである。

人類愛に燃えた コスモポリタンであった。戦況が不利なとき、土民軍を卒いて、軍資金の乏しいとき、自分の全私財を投じ、悪戦苦斗しながら‘私は、この義挙に加わったことを、今、すこしも 悔いていない。／ さもなければ、どこかで、私は 豪華な生活を営んでいたものを。／ しかし、それが なんだというのか。／’と書いた。

臨終のきわみ、<sup>うわごと</sup>譫言の中で‘進め。／進め。／’と全軍を叱咤 激励した Byron の心境は。

‘僕がクリスチャンになるときは、きっと一流のクリスチャンになってみせるよ。／’と言った如く、 殉教の心であった。

とまれ――

ギリシャ上陸以来、悪戦苦斗の日が つづいた。

もっとも‘頼みの綱’とした 土民軍に、エゴイステックな、意志統一なき、非ギリシャ的精神を読みとったとき Byron は幻滅を感じつつ 苦悩する。

親友の、そして Byron の片腕として 活躍する Trelawny さへ、Byron が大陸へ引返すのではないかと 憂いたほどであった。

しかし――

Byron は、そのようなことは 毛頭考へていなかった。苦悩しながらも、Byron は、たえず企画し、作戦を考へ、その命令をつたえ、本部との密接な連絡をとりながら、勝利の日を信じつつ Homer のヘルメットを冠し、馬上の

その勇姿を 被露し、東奔西走して救世主としての尊敬の的となった。

東方ギリシャは 有名な Klephts, Theodor Colocotronis と Odysseus Androutsos の、縄張りであった。そしてこの二人は全く異質の人物であった。

後者はあとで数回寝返りをうったのだが、この Klephts は、 まあ、盗賊の首領と考へてもよいし、 自由な立場で戦いを仕掛ける集団の首長と考へてもよい、そのような存在であった。

彼等は 豪華な金の刺繍をほどこした ギリシャの伝統的 ジャケットと fustanella 又は Kilt キルト——男子用 短スカートを身につけていた。

Colocotronis は epaulettes として もっぱら ひょうの頭を冠し、Odysseus は毛皮の capote カポーテの下ベルトに宝石をちりばめたピストルと 短刀をつけていた。

彼らは Byron が Shelley が、ギリシャ独立支援委員会が、描いた如き 合憲の、ギリシャ刷新 蘇生をねがうという点では 全く 関心を 示さなかった。

‘The world’s great age begins anew’

——世界の偉大な新時代が始まるのだ！——

と Shelley は Mavrocordato への献詩 ‘Hellas’ の中ですでに そうのべた。

しかし——

Klephts に関するかぎり 新しき ‘great age’ なるものは どうでもよいこと だった。彼らは ただ、彼らが 求めるものは ただ、みづからの手で トルコの支配を奪取することだけであった。

そして事実——

彼らの方が 共通の敵 トルコを料理することにかけては ギリシャ国民軍の  
統卒者達よりも より成功をおさめていた。

かくして アテネは すでに1822年、陥落していた。

しかし——西ギリシャには この the Klephts に敵対しうる戦闘能力を誇る  
一大戦闘集団があった。 それは Byron が 第一次 Graud Tour において  
すでに旧知の the Suliots であった。

Christian Albanian の統卒する この<sup>どうもう</sup>獐猛な 'Zulioties' 部族は 1822年、そ  
の<sup>とりで</sup>本據地の要塞から トルコ軍によって追い払はれ、何千もの集団となって  
有能な Napier の統卒のもとに Cephalonia に 定住していた。

Hercules 号に乗りこんだ <sup>けんけんどうどう</sup>喧喧囂囂たる 彼らの子孫たちは Byron を除い  
て船上のすべての者の脳裏に 恐怖をたたきこんだ。

Trelawny には、この獐猛な 'Zulioties' の中に ただ Byron の軍資金をねら  
い、探知し 嗅ぎつける 本能的 嗅覚力のみが 鮮烈に 映じていた。

それは——

<sup>はげたか</sup>禿鷹が はるか彼方の、あの<sup>ふにく</sup>腐肉、死肉を 嗅ぎつける本能を はるかに し  
のぐものとして。

Captain Scott にとって、 彼らは、呪はれるべき、いまいましい 'Zodiacs'  
であった。

Gamba にとって、 彼らは 詐欺師、ベテン師の集団として 映じていた。

というのは 彼らの軍団の多くの者には非 Suliots 的の血が いや さらに 非

ギリシャ的血が 浸透していたから

しかし—— Byron にとって

彼らは 若き日の 旧知の友 であったのだ!!

彼らの、あの、ジャンジャン 音たてて鳴るビーズ玉, ataghans ピストル, 長い銃 <sup>もてあそ</sup>を弄び, あるいは 吸飲用パイプ, 不潔な fustanellas, そして <sup>しらみ</sup>虱に 悩まされる カポーテ は Byron に Acarnaian の山々で かがり火 をとり囲んでの 野性の唄 と 踊り を思い出させた。

というのは、あの頃(1809年) Byron は 無事安全に Patras に帰り着くの  
に40人の彼らを傭ったことがあった。

Byron は この成功した 実験 経験をたびたび 繰り返したことでもある  
がゆえに その点では 彼らを 頼りにしていた。そして 即座に ボディガードとして 彼らを40人 傭った。だから もし 彼らが 金銭を要求すれば  
それを支払うのは 当然だと考えた。

今——そのような いきさつで 彼等が

Byron's Blacks ‘バイロン黒衣隊’ いや さらに Byron Brigade ‘バイロン軍  
団’ —— いま、そう よばれることになったのだが——の中核となるだ  
ろう。

Byron が 軍資金を用意し、募った目的は、他ならぬ、この目的、即ち、実  
は 主として 彼らへの pay のため でもあったのである。

Lega Zambelli が トグロを巻く <sup>まむし</sup>蝮の如く 五体にまきつけた money bag  
胴巻は 彼自身にとっては 主人の Byron 卿 ほどに 不安、心配の種ではな  
かったとしても、Byron にとって それは まさに 今、悲願である ギリシ

チャ独立の大義名分の達成、成否を かける <sup>いのちづな</sup> 命綱 であることは 火を見るよりも 明らかなことであった。

5月までに—— Byron は Douglas Kinnaird —— his English banker からすでに6000パウンド を 現金と 信用状で 集めていた。

Charles Bary —— 献身的 Genoese banker —— の 努力で 最後に、両替で 40000の Spanish dollar と さらに 正金で 10000ドル を手許に用意することが できていた。

手もとの紙幣 を両替するという問題は Charles Hancock —— Chephalonia の商人——そして Samuel Barff——Zante での、寛大な ギリシャ愛国の士—— と新しく 交際をもったときに すでに 解決されていた。

しかし——10月までには Byron の手許には 軍資金は ほんのわづかしが残っていなかった。 そのうち Kinnard が700パウンドを 送金してくるはずだったが。また 長く遅延していた Rochdale を処分する金—— Byron の希望価格は 12000ドルにはなるだろうと 推定していたが——が 送られてくるはずだった。 そして今、ギリシャ艦隊への6000ドルの出費を含み、莫大な軍資金が Byron の私財によってまかなわれるべく、決意のほどを Byron はすでに覚悟していた。

Celophonía に滞在中、この出費の捻出にもかかわらず、Byron は 自分の軍資金と彼の傭った Suliots が 無駄にならず奏効してくれることを祈り、またそうであることを どうにか信じることが できた。

Byron は 自分自身の出費（馬の糧食のための出費は 是非、必要としても）はきりつめ、いかに軍資金を節減するかに腐心した。

‘まあ、いいさ。俺の収入は 米国大統領のそれに匹敵するものだからな—’と心につぶやき 土民軍を備うための出費に 私財を投入することへの決意は すでにできていた。

8月11日——本土からの‘指令’を待ちながら Ithaca を訪れることを決意した。

一行——Byron, Gamba, Trelawney, Bruno, Browne,そして 従僕たち——は 騎馬で 長いみちのりを Cephalonia をよぎり 強行軍して St Euphonia にむかい、さらに、無蓋のボードで 灼けつくような太陽の光をあびながら 四時間をすすみ、この夢の島 ギリシャ本土へと 遂に到着した。

Homer の Odysseus は 10年の放浪の旅を経て ここに たどりつき 貞節な妻 Penelope が 今なお 自分をさがしていることを知る。そして、夫を刺殺した妻のことを記した Swiss tablet は Byron に、自分に終生の、刺殺的 damage を 与えた 妻 Annabella のことを 想起させた。

Byron の Ithaca での、そして 帰路での、あの、奇妙な、数々の挙動は、おそらく、この同じ origin によるものであったかもしれない——もっとも、Byron は、みづから 特に それらを 比較しようとはしなかったけれども。

一行が本土に上陸したとき出迎えはなかった。Byron は 洞窟で一眠りしたかった。しかし 大陸育ちの紳士たちの一行は皆 夜気の中で 眠ることには 不賛成だった。

亡命中の あるギリシャ商人が 一行を泊めてくれ その翌日、 The Governer, Captain Knox が一行の到着の通知をうけている間、Byron は 洞窟の入口の無花果の木の下で眠った。

ここで Byron は 夢を見た。 いや、そしてそれは それから 醒めることを  
きらったような 祝福された、幸福にみちた幻想であった。

しかし Capital Vathy への遠乗りは、野性のブドウの蔓は緑濃く systus の  
においが つんと鼻をついた。

Byron は Mrs. Knox を Mrs. Penelope とよび picnic party の皆に ジン割  
りの 'Pierian Spring 酒をふるまうことで Mrs. Knox をすっかり魅了してしま  
った。

‘あなたの美しい島で 共にすごした数日間は 私の生涯で 最も透明な た  
のしい日々でした’

と、後に Captain Knox にかき送った。

Byron は、また、Thomas Smith というもう一人の訪問者を まるで 旧  
知の間柄の如く遇し 彼にむかって、妻 Annabella のこと、Ada のこと、そ  
して、自分の将来のことについて—— Lady Blessington が、溜々と まく  
したてる 彼の雄弁をつつしむようと 警告したにもかかわらず——自分  
の考へを あくことをしらず しゃべりつづけることによって、多少の驚意の  
念をまじえて、すっかり 彼を魅了して しまった。

その夜 Byron は 重態におちいった。そして待医 Bruno によれば もし彼  
の benedette pillule— blessed pills がなければ 到底 助かることは なかつ  
たであろうほどであった。

‘Byron 卿は まるで死の宣告をうけた老人のように 浜辺をやってきた。’

と 翌朝 Smith は言った。

Livadia で 14年前に会ったことのある自由思想の大僧上に、今、偶然の再



会をし、この大僧上は Byron にすっかり魅了されてしまった。そして、再会をよるこび<sup>ニ</sup>ン<sup>ク</sup>の臭気のふんぷんとする 粗<sup>あら</sup>い ごっごっとしたキスを Byron になげかけた。

Byron は しかし この島の古き遺跡にふさわしい魅力は 今やもう感ずることはできなかった。

Captain Knox と Ithaca の Suliot の逃亡者たちのことを論じ合うのをたのしみ、彼らを救うために 250ドルを 惜しげなく投げだした。

しかし ‘School of Homer’ や ‘Alethusa’s Fountain’ には すこしも 興味関心を示さなかった。

Browne から ‘Ithaca の古き思い出、旧所名跡には興味はないのですか’ とたづねられたとき ‘詩的ペテン師’ のことに言及して 痛切に反論した。

また Trelawny のことばをきいたとき、‘古代研究の、好古的 twaddle’ と ‘去勢された、弱々しい、時代おくれの人間たち’ がそれを永続させようとするのを 徹底的に 拒否し 反撥<sup>はっ</sup>した。

Byron の想<sup>おも</sup>いは いま

‘泳ぎたい…。ひとびとは、私には、いま、透明な休憩時が すこしもないと思うだろうか。私が くだらないことを もっと 書き散らすため はるばる ギリシャへやってきたと思うだろうか。私は、私が もっと立派ななにかをすることができることを示したい’ と、その意中をのべている。

Byron がなし得た その better thing は、亡命家族 Chalandritsanos family を Ithaca から Chephalonia へと連れ戻してやったことである。そして、そこで、その母と娘たちに一定の手当を支給してやった。

彼女たちは Patras で栄えた暮らしをしていた。彼女たちの生活をとりもどし

たことをきいて Lukas という15才の息子は Klephts と戦っていたが 本土を去って Byron の page となった。そして 彼の生活は好転した。

しかし、一方、Byron の健康状態は、はかばかしくなかった。

benedette pillule は 再び 16日 もっと劇的に 使用されねばならなかった。そのとき Byron は Cephalonia に帰っていた。焦げつくような太陽の中で海を泳ぎ渡った後で St Euphemia の酒宴、そして Sami の僧院での レセプション とパーティーは夜を徹して続いたが、Byron は大僧上の歓迎のあいさつ中に うめくように、ぬけ出していった。そして 叫んだ。

‘誰も この俺を この厄介な狂人状態から救ってくれようとはしないのか?’ と。

自分の部屋にとちこもり 家具をたたきこわし ベッドクロースを、衣裳を、ずたずたに 引き裂き やってくるすべての者に ‘Bah! 出てゆけ! 消え失せろ!’ と がなりたてた。

Trelawny も Smith も おそれ、おののく Dr Bruno も 皆、手のつけられぬ発狂ぶりに Browne が benedette pillule を むりやりに 喉へと押し下してやった。

かくして 翌朝 Byron は大僧上や僧たちに 前夜とは うって変った親しさを示した。そして——これが Sami への visiting の Byron の唯一の思い出として——快活に、あの cockney の唄の調べを くちづさみながら Argostoli へと馬で ひき返していった。

この Sami での悪夢の如き一幕は 8月の暑気の中での あらゆる種類の過

度の耽溺のせいである と考えられる。

‘私は 炎<sup>も</sup>えつく陽光の中で 日中の かくも多くの時間を費やすことに いやげがさしている’ と書いた。

他方 これは 彼の高揚され、高ぶった感情的経験によって激化され悪化された 陰悪な怒りの一様相であったかもしれない。

僧院に入る前に Byron は 門の外におかれた石棺の中に とびこんでいた。そして、自分の手につかんだ頭蓋骨を想像しながら

‘Alas poor Yorick’ とあの Hamlet の文句を想い出しながら

‘Alas poor Byron’ — ‘ああ かわいそうなバイロンよ’ — と しきりに吟誦していた。

Byron は 8月18日の朝遅くまで眠った。Trelawny が彼をおこしたときまた別の悪夢から まだ すっかり めが醒めていなかった。

‘僕は 大変な夢を見たよ。その恐怖に 今ふるえている。僕は ギリシャ遠征の壮挙には ふさわしくないのだ。’

まったく別人の Byron —— 行動的にして冷静な —— には Cephalonia での活動の糸口が見えてきた。

Byron は 有名な Suliot の指導者 Marco Botsaris と 接触をもった。そのとき彼は 彼の卒いる350人の Suliot と共にトルコ軍の侵入を 阻止していた。

Botsaris は Byron に対し 熱心に Cephalonian Sutiots に参加するように招いた。そして、それは Byron が好意的に面倒をみていた Suliot たちであった。

‘Don’t delay!’ と Botsaris は Byron に要請した。しかし —Alas! poor Marco! —— ああ、かわいそうに Marco は、——その要請後、三日後に 彼はトルコ軍の兇弾に倒れた。そして それは Byron が もうこれ以上 遅延してはならない、早速 参加を決断すべきであると考えた直前のことだった。

今——Byron は 行動をおこすことは、しかし ひかえねばならなかった。その理由は ヨーロッパでの最高の名声を博している、そして彼の信頼する 2 人の、ギリシャ人 adviser を すでに失っていたから。

Botsaris は死に、Mavrocordato は潜伏して 身を隠していた。

Tripolitza —ギリシャの首都——そして、London からの ニュースを待ちながら Byron は Argostoli の male society に合流した。

ここで—— Byron は、  
英国駐屯軍が ‘Satanic School’ ‘悪魔派’ の旗頭<sup>はたがしら</sup>としての自分を排斥するどころか、正反対に 温く迎えて 食事を共にすべく 誘ってくれたことに驚きかつ よろこび 彼らの音頭をとってくれた祝盃<sup>こた</sup>に対して、魅力的 力強いスピーチで これに応えた。

駐屯部隊の doctor Tames Kennedy は Methodist の教義を信奉する、まじめな Scot であったが、罪深き同志たちのため ゼミナールを もうけていた。Byron も参加した。

Byron の 覚<sup>おぼ</sup>えた 形而上学的 渴<sup>かわ</sup>き——それは ‘Manfred,’ ‘Cain,’ そして ‘Heaven and Earth’ の中で わづかに 癒やされたが、いま、ふたたび 湧きおこっていた。

James Kennedy の一質問を許されることなく——延々と四時間にわたる講義をきいて Byron は Kennedy の friend となった。そして その後の講義は

とばしても 解し得たが 自分の座右の書——姉 Augnsta が 彼に与えた——として、つねにもった Bible へと跳び、——自分が Missolonghi に到着するまでには very good Calvinist Kennedy の思想をうけつぎ さらに、それを 超えることができる と確信した。

Dr Kennedy の、Byron についての罪深き過去に関する卒直な意見を Byron

はなかば真剣に　そしてなかば揶揄する如くきき入り　そして　これに応えて、

‘あなたは　私が　ただちに完全なクリスチャンになることを期待しておられる’　といった。

このグループの　メンバーの Colonel Duffie は、Byron が Methodist へ改宗することは　かなりの時間を要すると考え　このことを　残念に思った。

‘His Lordship——Byron 卿は　今　すぐに美しい讃美歌をかくべきである’  
と Byron のために祈った。

Byron は　<sup>こた</sup> 応えた。

‘もし　僕がクリスチャンになれば　決して不<sup>・</sup>真<sup>・</sup>面<sup>・</sup>目<sup>・</sup>な　クリスチャンにはならないつもりです’

彼の友人の他の連中たちの中には、‘Don Juan は　次の canto では　一人の methodist になるはずだ。だから　その作者 Byron はいま synical に local colour を集めているのだ’　と　いうものもいた。

しかし——Byron は

Saint Kennedy に　たいくつしつつも　彼の ‘sermons with soda water’ は Byron にいつも不思議な呪文　を投げかけつづけた。

おそらく、Kennedy の Byron に与えた感化は、一つには、　彼が Byron に贈った一冊の書物が、　不思議に　そのときの Byron の心境に　ふさわしいものであったことに帰因するのであろう。

‘あなたは　私に Lord Rochester の死について書いたものを贈ってくださいました。そしてそれは as a tact par-excellence—’　ぬきんでた　ひとつの事実’　—

—として 私にとって 特別の意味をもつのです’ と書いた。

33才の生涯を火刑に処せられて死んだ Lord Rochester は Restorian poet として、Byron としても書いたであろうようなことばで、その日常のルティーンを 書き綴っている。

‘私は 11時に起き 12時ごろ 食事をとった。7時前には すっかり 酩酊し 次に私のすることは whore 売春婦 をよびにやることである。そしてそのとき ‘平手打’ を怖れつつも。’

たしかに Dr Kennedy は、Byron が悔い改めた Rochester に対して a Dr Barnet であってほしいと希望したにちがいない。

淡黄色の乗馬ズボン、 緑色のうちひもで飾られた上衣、 金色のバンド、 房のついた尖った、 羽毛で飾られた、 英雄ホームーの ヘルメットを擬した軍帽をかぶって 馬で 駆けめぐる Byron の雄姿は、もう、これまでには なじみ深いものとして すっかり知れ渡っていた。

毎日 Byron と Trelawny は Hercules 号から岸の岩まで泳ぎ オリーヴ の樹の下で食事をした。

ある日 Byron は びっこの足を ズボンをはいたままで Trelawny の方へ 高々とあげて いった。

‘僕は この呪われた足が 戦闘で 吹きとぶことを 望むよ’ と。

そのとき Trelawny は

‘もし君が 僕に その頭脳の一部をくれるなら 僕の両足と交換しても よいよ’ と言った。

すると Byron は すかさず 言った。

‘そのような交換を君は きっと後悔するよ。何故ならば 君が Shelley を火葬にふしたとき Shelley がそうだったように 僕の頭脳が煮えたぎるのを感じて  
るだろうから’

煽動され 今や 手におえぬ 不統一の Suliot の Byron への要求は 強要的なものとなってきた。一ヶ月の 特別の臨時の pay と 武器をあてがわれ  
できるだけ多くの Suliot たちを Acarnania へ連れもどす任務を Trelawny は あてがわれた。Byron は 彼が最後の瞬間は和むだろうと思いつつも しかし 無意識に 嘘が口から出るほど 拒否反応を示す反動的性格を示すこの種族に しだいに 幻滅を感じはじめていた。

Byron は 書きのこした。

‘自分が ギリシャへ乗りこんだのは Suliot が忠実なることを信じたためであり 投機的欺欺の部族としての彼らの軍団を卒いる考えは毛頭予期しなかったはずなのに。バラバラの分派としての意志統一なき Suliot 集団でなく 意志統一のできたギリシャ民族、国民意識の高揚された民族を指揮すべくやってきたのに。’

Trelawny もまた、だんだんと、落ち着きなく、あせりを感じた。

しかし その理由は 彼は ギリシャ国民と行を共にすべくやってきたのではなく 彼は adventure を求めてやってきたがゆえであった。

そしてその adventure が 8月の終りに 彼を招いた。

Hercules 号が ギリシャ海での任務を完了し帰還の途につくや Byron は 緑の丘の、あの、クールな中に 穏やかな 静けさ をたたえた Cephalonia へ移ることを決意した

Trelawny も Browne も Byron に 同行しなかった。

Byron の死後 Trelawny は この間の事情を 次の如く 説明している。

‘この Byron の 単独行動は 結局, Byron の いつもの, あの, 手まどる, ぐづぐづする 習慣によるものである。鬱積した感情によるいらだちが爆発したものである。’ と。

Byron は Cephalonia に上陸するやいなや いつものおきまりの如く, ぐづぐづと時をすごし なにかをたくらみ 優柔不断のうちに 無為に 日が経っていった。

そして それは Byron 独得の, 習慣的考えでもあったのだが

‘僕は6日間 ある場所に とめられると 6ヶ月間は 誰にすすめられても, 尻をあげることが できなくなるのだ’

Byron の 無為 への, この, 批難は 詩をかくために といって 今や 反撥できる 弁明できる もではなかっただろう。

だがしかし——

みづからの この悪癖を絶ちきることへの感情的反撥は 戦争拒否感を意味するものではなかった。

William St Clair ——ギリシャ愛国の歴史家——のことばによれば

‘Byron は ギリシャ独立戦争に蜂起した愛国者の中で ひとり 孤立無援の状態におかれて 口には出さなかったが みづからが, その知性において



力量において みづからの優越性を いまや 懷疑しはじめた、’ とのべている。

Byron には 眠れない夜がつづいた。それは 前年の 二度にわたる はげしい水泳のためだった。朝 9 時に起きて 手くびと腰まわりを必ず測定し むくみ ができてないかを調べ——むくみがきていれば Epson salts を服用した——紅茶で軽い朝食をすませ、午前中 Pietro と 活動しつづけた。

隣接する村 Lakythra の平坂な岩の上で——そこに坐って Byron が 最後の詩をかいいたのだという伝説ものこっているが—— Byron は たびたびの連絡のための事務上の手紙をかいいたのである。

しかし——Byron には、この壮挙への悔いはいささかもなかった。10月——その想いを、思いやりの情をこめて、Teresa へと書き送った——そして その感情は、彼女の兄 Pietro にも 同月、明かしたのだが

‘私は まあ よくも ここへきたものだ。愚か者だったかもしれぬ、たしかに。しかし そうしなければ 私は 私の時と金を よりよく使うことができたであろうか？ よしヨーロッパの どこかの国で おもしろくもない どこかの土地で 豪華な暮らしを送ることもできたであろうものを。——しかしそれは、単調な生活であつたらう——たとへ、そのような生活が 満喫できたとしても、それが果して 何というのだろうか？

もし、もしかりに、ギリシャがこの<sup>はたあげ</sup>旗挙に敗れることがあっても 私は この廃虚の中で みづからを葬ればよいのだ。ギリシャが独立の栄光をかちうれば その暁には——私は 永久にギリシャの どこかに、たぶん Attica で——そこで かつて 数ヶ月を過したことがあったから——永住の居を構えたいのだ。’

この Byron の Teresa につたえた感懐のゆえに Trelawny は 9月6日、Mary Shelley にあてた手紙の中で 嫉妬 めいた気持で 嘘言を述べる事となるが Trelawny は その中で

‘Byron は 今 Italy に引返すことを考えているが 私は 勇しく踏みとどまり、戦をつづけるつもりである’ と書いた。

Byron は——

Metaxata に到着してから Italy 時代の財産をすべて処分、売却するように命じた。だが 彼の最愛の Napoleon の、それを擬した、あの、馬車と Ada の二枚の写真、そして数冊の書物——その中の一つは、‘Vathek’ だったが——は愛着のゆえに、のこして置いた。

Teresa に対して——9月に手紙をかき送って以後、イタリーで再会したいというような希望は、それとないことばは、のべることなく ‘ひょっとしたら 来春になって……’ と、Zante に 彼女を招くかもしれぬとのみばくぜんと 伝えた。

一方——Pietro は

Byron に向って、妹 Teresa への 慕情は絶ちきって ‘修道士の徳を生きる’ ことを説きつづけた。

Metaxata における、静寂な、革命前夜の<sup>せいしつ ひととき</sup>静謐の一瞬が 突如、ある出来事によって破られた。これは 地震が<sup>ぼっぱつ</sup>勃発したことによるものだった。

この突発事件に ただひとり Byron のみが 沈着冷静だった。それは——Byron の跛行のゆえに賦与された威厳をもって、とり乱すことなく——Byron は いついかなる緊急事態にも つねにそうであったが——ゆっくりと 揺らぐ家から しづかに 外へすべるように逃れ出た。一方、友人たちは皆、あるいは窓から とび出したり、階段をとび降りて 中庭へと逃れた。

かくの如く つねに冷静沈着そのものの Byron も ときどき ギリシャの友人たちによって かき乱されることがあった。そして憤慨した。

中立の立場を守る Ithaca で 坐礁したトルコの宝船の乗組員を惨殺したギリシャ人、労働作業中に地すべりで 生き埋めになった同僚のため、なす術<sup>すべ</sup>をしらず 呆然と立ちつくすギリシャ人。 そのようなとき Byron は みづから 鍬をとり 猛然と土を掘りおこし 救出してやった。

かくの如きは 明らかに Byron の彼らに示した 一つの模範であった。

もし Byron が このギリシャ本土の rival party にかくの如き博愛の手をさしのべていたら、

しかし——

‘私には、この両者の間に立って とても むづかしい役割を演じなければならぬのだ。だが、この両者を和解させてやるのでなければ 私の存在が彼らの内紛不和と無縁なものとなるであろうのに、’

Byron は このゆえに 思いわづらい、心を痛めた。かくて 今の Byron の革命前夜の静寂はすべて Greek friends によって 掻き乱されたのである。

ギリシャの地から書き送る手紙の中で Byron は 事態好転の兆が見ゆる日まで ギリシャ人のことについて なにかを のべることを避けた。そして彼の journal の中で 真実に立ち向はねばならぬとまでさえ ‘四世紀にわたる’ shackles 束縛<sup>くわく</sup> の心理的影響を力説強調した。——それは、それから、ギリシャ民族は 自由解放の三年を経ても逃れることはきなかったのであるから

‘The links are still clanking, and Saturnalia is still too recent to have converted the Slave into the sober Citizen.’

クサリは まだ ガチャガチャと鳴りつづき

あの お祭り騒ぎは 真新しく

奴隷たちは真面目な市民へと

変えられることはできぬのだ

この島ギリシャに 今、新しく三人の新参者が訪ねてきた。そして このことによって Byron の気持が いっそう はっきりと澄みゆくのに 大いに役立ったのである。

その一人は George Finlay という賢明な、若き、ギリシャを愛する歴史学者——膨大な History of Greece を後年、著述することになったが——で、10月、Byron を訪れた。

Byron は Finlay に会い 先づ第一に彼があまりにも Shelley によく似ていることに驚嘆した。そして 次に、  
his evident overdose of entusymusy によって なやまされ 攪乱されるのであるが……。

Byron は Finlay にむかって言った。

‘君は ドイツで学んだばかりなので このギリシャのことについては まだほとんどわかっていないと思うが’ とのべ、いろいろと ギリシャ人の性格について 啓蒙した

Finlay は——

Byron が情緒的に高揚された考えをのべるときの、説得的熱のこもった声、そして、単調な口調、 が交互に、しかも ウイットと諷刺が乱発されるのに すっかり驚嘆した。

Finlay は そのときのことを こう 述べた。

‘二人の異れる人物が 一人の Byron 卿の身体に宿っているように思えた。

一人は女性的で同情的、優しさにみち溢れ、いま一人は、男性的で明晰な決断力を示す、特色ある人物であった。その一方があらわれるや、他方はすっかり姿を消した。’

このような印象ゆえに Finlay は、

Byron の武人としての栄光を渴望する気持は、つねに戦争なるものを忌みきらう Byron の先天的嫌悪感から駆り出されるものであると推論した。

11月に 全員の一致した気持ではないものの、Byron は Tripolitza に臨時政府を訪れることの同意をとりまとめた。

しかし 11月中旬には 新しい局面が展界した。

ロンドン委員会の対ギリシャ資金援助運動は失敗に終わった。

諸外国の対ギリシャ愛国者運動とちがってロンドン委員会は わづかに 12000ポンドたらずの援助資金しか集め得なかった。

ギリシャ政府としては 今 世界で投機的中心となってくれるであろうと考へたロンドンでは容易に募金できるであろう800000ポンドの国債に もっぱら希望をつないでいたのであるが。

ギリシャ臨時政府は談合のため、2人の代表とともに Hamilton Browne をロンドンに派遣した。

Browne は Cephalonie を通るとき Hydra の亡命者 Prince Mavrocordato からの書翰を Byron に手渡した。

その書翰は 一目瞭然と明らかにしていたが、西部ギリシャの Missolonghi が Morea の Tripoliza ではなく Turks トルコ軍からのため危険状態におちいていた。

そして Byron 卿の 300000ドルの支援があれば ギリシャ艦隊は 東部の潜伏場所から 西部を救うため出動することができるであろう、そのような、危機状態にあった。

Missolonghi の運命は Byron 卿 と、その軍資金援助にかかっていた。

次に来訪したのは 英国人 Dr Julius Milligen で 11月初旬 Byron のもとに滞在したが、彼は—— Finlay が あまりにも ギリシャ人に過熱し 情熱的であったのにひきかえ——ギリシャ国民に対して むしろ シニカルであった。

しかし Byron は彼に好意を示し Suliot への医師として Missolonghi へ同行してくれるよう説得した。

Milligen のいづく Greeks へのシニシズムゆえに Byron が ある意味では ‘Eastern’ の衝突不和’ に対して ある不信感を醸<sup>かも</sup>し出されたとも考へられてよいかもしれぬ。

‘太陽のもと、ギリシャ民族は おそらく、最も 墮落<sup>だ</sup>した、品性下劣な民族である’ とかつて Byron はのべたが、それは Milligen のギリシャ人への酷評を引用したことばであった。

とに角、しかし——

‘Westerns’ は Milligen の来訪以後 すぐに勝利をおさめ そのため Byron は Tripolitza へむかう考えを放棄した。

11月22日—— 3 人目の重要人物 Leicester Stanhope 大佐が到着した。彼は Lord Harington の長子であり 印度での Mahratta War において勇名を轟かせた猛将であり The London Comittee より派遣された代表であるが、この London Comittee の性格の合法性、非合法性を端的に伝える典型的人物であった。

Byron は Dr Kennedy を very ‘clever and eccentric’ な人物として 観察したが Colonel Stanhope は、これに10倍も わをかけたほど賢明 冷徹な一面をもち、さらに、100倍も より きばつな、変った 性格の持ち主であった。

the London Committee の創立者の中でも最も著名な人物であり、かの Teremy Bentham の、最も熱烈な信奉者であった。

Stanhope は　ギリシャ民族の血の中に　最後の一滴まで Bentham の Utilitarianism の信条、教義を期待した。

Stanhope は　考えた。

トルコ軍と戦うために　ギリシャ人は文盲であってよい。大砲の前に印刷機があればよい。poker ‘火かき棒’の問題は　知らずとも Congreve rockets ‘のろし’の前に mathematical instruments 計数器　があればよい。鏡の前に　バターでなく　パンフレットと新聞と tract 政治雑誌、いや—うんざりした Napier が　いったように——　管、水彩絵具、ラッパ、すばらしい掛布があればよい。

Napier は　今——

ギリシャ愛国軍の指揮者として　ロンドン委員会が、その従軍、指揮のゆえの奉仕に対するペイを支払うゆとりがないことに、　特に怒りを覚えていた。

Napier は、この義勇軍参加のために　英国軍における、みづからの任務を放棄したのであるから。

Byron は　つぎつぎと入ってくる戦況についての情報をききながら Jericho の場合のように Constantinople の城壁も　やがて崩れおちるのも　やむをえないのかもしれないと考えた。

Stanhope は　変った性格にもかかわらず、Byron には欠ける、軍隊を指揮し、命令し、進軍させ、動かせる感覚は抜群で、専門的戦略家であった。みづからは　12月6日 Missolonghi を去り、彼自身の出発点 his own point of departure に Byron を強引に　ひきよせた。

13日——

Byron は ギリシャ艦隊への 300000ドルの軍資金の貸付金をどうにか工面できた。そして一方、Mavrocodato は 2 日前にすでに Missolonghi に到着していた。

今—— Byron には

‘軍資金を送れ’ という 矢の催促が すべての部署から せまられていた。Byron は 委員会の、軍需品受領委員（代理人 commissioner）に任命されていた。そして、Missolonghi の各部署は 彼と彼の軍需品を 緊急に必要としていた。

The Suliote corps スリオット軍団は Byron を 指令官として任命していた。そして この軍団も、Byron と Byron の援助資金を緊急に必要としていた。

Mavrocodato は言った——

‘Byron 卿のこえは、いまや、われわれの oracle 神託 である。’

Stanhope は言った—— ‘Byron 卿こそ いまや われわれすべての 知慧袋 であり金の壺 である。

そして Byron の天賦の才は 彼によって如才なく命令へと変えられていった。かれらは 熱い眼で Byron の到来を まちこがれた。

12月29日、上陸する直前—— Byron は 若き日々の、そして壮年時代の、3 人の友人に 書き送った。それは—— Moore と Hobhouse と Kinnaird に宛てたものであった。

Byron のかき送ったメッセージは、すべて Byron の 脳裏をかすめた、あ



る種の、靈感による 予知、予見であった。

‘もし、熱病のため、疲労のため、飢えのため、いや、その他の理由で、僕という詩人が この生涯を きりつめるようなことがあれば 酒盃を手にした君のおだやかな微笑ほほえみの中で せめて 僕という君の友がいたことを憶い出してくれよ’

と Moore にかき送った。

…… remember me in your “smiles and wine.”

——それは Moore の Irish Melodies からの 優雅な引用であった。

Hobhouse 宛には ある諧謔かいぎやくと irony をまじえて

‘Mavrocordate は 自分が 全軍を electrify 帯電させることを望んでいる。’  
と、ニュースを書き送った。

しかし Kinnaid の耳もとには、ラッパの音を高く力強く 吹きつづけた。それは——

‘この大義名分のために さらに 100000 ドルを募金するだけでなく Constantine の 城壁を、怒濤の如く攻めよせて、足下にガラガラと崩壊させてみせるよ’ という Byron の望みをかき送ったのである。

‘いま、 ルビコン河を 渡りつつある。’

‘En Vant’, Suliot の闘いの 叫び。’

それは—— “On—on—on” 進め。進め。進め。 と、全軍を叱咤 激励する Byron の命令であった。

今、Byron の心境は——

自分の死期を、彼岸をじっと凝視<sup>みつめ</sup>る予言者として 自ら描いた Conrad, さらに、  
奇怪な罪惡に苦しみつつ、神をも人をも罵り、Alps 山中に破壊を叫ぶ Lara,  
さらに、白眼孤独の Manfred の 自画像を もっともっと 浄らかに ゆた  
かに おおらかに 塗り変えようとしていた。

Byron は Manfred をして 絶叫させた。

We are the fools of Times and Terror: Days  
Steal on us, and steal from us: yet we live,  
Loathing our life, and dreading still to die.

時間と恐怖に<sup>もてあそ</sup> 弄 ばれる

愚か者よ、我々は。

日月はしのびより、しのび去る。

だが我々は生きのびている。

生きることを忌み嫌いつつ、

だが死を怖れつつ。

Byron は 自分の死期をみつめつつ、自分の浄化 をひたすらに 欣求<sup>ごんぐ</sup>してい  
た。

‘みづからの完成’を求めて無何有<sup>むこう</sup>の郷<sup>きと</sup> を希求した。

祖国 イギリスの偏見と偽善を痛罵しつつ、祖国追放の身を、みづから 革  
命家をもって任じ ギリシャ独立党を援助する大義に殉ずることに自分の死地  
を、完成を求めた。

‘禿鷹’の如き 鋭い目を<sup>くちばし</sup> 嘴 をもち、世界苦 の中を 羽ばたき 放縦と

歓楽<sup>むさぼ</sup>を貪<sup>くら</sup>り喰<sup>かす</sup>い その滓<sup>かす</sup>まで 飲<sup>の</sup>みほしたとき、 その胸中には 空虚<sup>そくこ</sup>な 寂<sup>せき</sup>  
寥<sup>りよう</sup> <sup>ただ</sup>が 漂<sup>ただ</sup>よふ。

孤独なる王者として終始した 自我の強い詩人 Byron には その烈々たる  
義侠心のゆえに、大いなる夕陽の沈まんとするとき、滋<sup>あたた</sup>かい包擁的 人類愛、  
cosmopolitan <sup>ところ</sup>の情が 鮮烈に蘇<sup>そ</sup>りその光が、虐<sup>しいた</sup>げられたギリシャ全土を 照  
らすのである。

罪多き過去への 悔恨の情に堪えつつも、むしろ Satanic 悪魔派と呼ばれる  
ことを誇り、自らの弱さを暴露すること好まず 奔放に 自己の道を歩んでき  
た Byron は 強者であり、勇者であり cosmopolitan としての自己の所信を行  
い、詩<sup>うた</sup>った 英雄詩人 であり その意味で、Goethe は Byron 卿 こそ、‘das  
größte Talent des Jahrhunderts ‘第19世紀最大の才幹’ と 讃辞を贈った。

しかし、ギリシャの地で ギリシャ独立軍を指揮しつつ 苦闘する Byron  
に 勝利の微光<sup>ほほえ</sup>が 微笑<sup>ほほえ</sup>むときは、いまだ、遙<sup>はる</sup>く 遠<sup>とほ</sup>き茨の道であった！

#### 参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron: Vewis  
Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.